

## 第4章

「<sup>かぜ</sup>風□<sup>まど</sup>窓□<sup>あ</sup>開□た。」は「<sup>かぜ</sup>風<sup>まど</sup>が<sup>あ</sup>窓ヲ開<sup>ケ</sup>た。」か、  
「<sup>かぜ</sup>風<sup>まど</sup>デ<sup>あ</sup>窓<sup>が</sup>開<sup>イ</sup>た。」か？

—自動詞・他動詞・陳述単語説批判：チェコ人学習者—

【文法1】

キーワード：無意志動詞，意志動詞，現象叙述文，状態叙述文，行為叙述文，自動詞，他動詞，音素，音節，アクセント，語，文，イントネーション，符号，一語文

### 1. 無意志動詞・意志動詞と自動詞・他動詞との相違は？—小テスト—

筆者が毎年度前期に開講している日本語論の受講者は、約7割が日本人学生、約3割が外国人留学生である。毎回授業の冒頭において、導入として小テストを課すことにしている。日本人学生と留学生とは日本語の習熟度が極端に異なるので、応答の相違が楽しみなのである。

次の文の□の中に、平仮名を一つ書き入れ、文として完成させなさい。

<sup>かぜ</sup>風□<sup>まど</sup>窓□<sup>あ</sup>開□た。

これが、平成17年度前期第一回講義の小テストであった。結果は下記のとおりであった。

- A 風で窓が開いた。 日本人学生 32名 (53.3%) 留学生 6名 (10%)
- B 風が窓を開けた。 日本人学生 12名 (20%) 留学生 6名 (10%)
- C 風で窓を開けた。 留学生 2名 (3.3%)
- D 風が窓を開いた。 留学生 2名 (3.3%)

日本人学生だけに限定してみると、72.7%の学生がAの無意志動詞文を完成させている。日本語としては、無意志動詞文が自然な文なのである。

日本人学生の中には、祖母がいわゆる中国残留孤児であったため、小学校の二年生の時に来日したという者もいるが、その彼女もちゃんとAと答えていた。

日本語はある事態を叙述する際、自然現象として表現する傾向が強い。その

結果、無意志動詞文が多くなる。

無意志動詞文は現象叙述文、状態叙述文という言い方もできる。

日本人学生でBの意志動詞文を完成させた者は、文は主語から始まり、主語と述語からなるという英語的発想を内部に保持している者たちなのである。

あるいは、詩人的要素を多分に内包している者なのかも知れない。「風が窓を開けた。」という表現は、「風」の意志を前提とした表現で、日本語では擬人法というレトリカルな表現になってしまう。

意志動詞文は行為叙述文という言い方もできる。

CやDの文を完成させたのは留学生で、日本語能力がまだまだ十分でない者たちであった。

チェコのパラツキー大学は筆者の勤務する大学と交流協定を結んでいる姉妹校であり、毎年2～3名の学生が交換留学生としてやってくる。2006年度に来た交換留学生の一人は2メートルを越す長身で、バツタのように長い脚をもてあましていた。

彼は、迷うこと無くBの意志動詞文を完成させている。チェコのパラツキー大学に限らず、ブルガリアのソフィア大学から来た学生もそうであったが、言語学の基礎的訓練を受けている。そのため受講後の質問は、専門的なものが多く、手応え十分な反応を示してくれる。

脚長君は、「先生、無意志動詞文、意志動詞文と説明なさいましたが、なぜ、自動詞文、他動詞文という用語を使用なさらないのですか？」と尋ねてきた。さすが、パラツキーと思いつつ、「自動詞、他動詞と当然のように使っているけれども、自動詞、他動詞とはなにかということがはっきりしていないんだ。だから、これらの用語は危なくて使用できないのです。」と答えた。

以下、次節において、これに対する答えの概要を紹介する。

## 2. 「打つ」は他動詞か？—自動詞、他動詞の定義への疑問—

最新の国語辞典で、世評の高い『明鏡国語辞典』（北原保雄編、大修館書店、2003）の「打つ」という動詞項目を検索すると図8のようになっている。

16の意味ブランチ、11の「語法」による解説、「表記」における「打・撃・討」

の区別, さらに, 「拍・搏・撲・伐・射」等の区別などの説明, 類書と比較すると抜群の詳説ぶり, 親切さである。特に, 「表記」の解説は, ワープロ時代を意識したもので, 親切な記述をモットーとする本書の特徴をよく表しているといつてよい。

ところで, 冒頭において, 「他動詞」と記述しているのであるが, これは正しい扱いなのであろうか。

例えば, 次のような記述には疑問が残る。

- ② (エ) 時計が音を立てて時を知らせる。時を作る。「時計が十時を——」
- ④ 雨・風・波などが物に激しく当たる。「波が岸壁を——」「滝水に——・たれて修行する」「雷に——・たれて死ぬ」
- ⑤ 感動させる。また, 強く刺激する。射る。「迫真の演技が観客を——」「献身的な愛情に心を——・たれる」「臭気が鼻を——」
- ⑭ みずからを前方に打ちつけるような動作をして, その動作や状態を作り出す。また, 刀などを打ち鍛えて反りをもたせる。「寝返り [もんどり] を——」「黒髪が波を」「雪崩を——・って攻め寄せる」「刀が反りを——」
- ⑮ 心臓が規則的な動き (= 拍動) をくりかえして, 脈拍を生み出す。「動悸を——」

これらの例は, いずれも現象叙述文, 状態叙述文であり, これらの「打つ」を「他動詞」と認定することは誤りなのではなからうか?

特に, ④の語義解説は「雨・風・波などが物に激しく当たる。」とあり, 「当たる」という「自動詞」で表現されている。このブランチがなぜ「他動詞」でなければならないのか, あるいは, 執筆者自身, 自動詞・他動詞の区別が曖昧になっているのではないかと疑われてくるのである。

そもそも, 「打つ」の16の意味ブランチを羅列して, 「他動詞」のもとに一括して記述すること自体が無理が感じられる。最初に, 動作動詞用法としての「打つ」(他動詞)と状態動詞用法としての「打つ」(自動詞)に大別し, それぞれ下位のブランチを記述するという立体的記述を心がければすっきりしたものになったろう。最初に, 自動詞・他動詞の区別をしてしまうのは, この辞書に限

う。つ「打つ・撃つ・討つ」他五①②手・棒・むちなどで瞬間的に強くたたく。また、物と物を強くたたき合わせる。「バットでボールを」「太鼓を強く同慶の至りと膝をを」「鉄で田を」「鉄を打ち入れて田を耕す」「鉄は熱いうちに」「キーを」。つて文字を出す「手を」。つて喜ぶ④瞬時に頭を強く当てる。…に…をぶつける。「机の角で物を」⑤「闘」→「へ」身体部分をとる。⑦と異なり受身を作らない。

②「打つ」ような動作をして、ある(目立つ)状態を作り出す。「ホームラン」「スパイク・ポギ」を」「神前で拍手を」。④材料・素材をたたいて、その物を作り出す。「能面」「刀・そば」を」「裏を」(「裏打ちをする」)⑤記号や番号などを書きつける。付す「つ」ける。「文末に句点を」「事件にピリオドを」。応募作に批点を」「野心作に非を」(「野心作の欠点を指摘する」)⑥時計が音を立てて時を知らせる。時を作る。「時計が十時を」。⑦キーをたたいて、電報などを発信する。また、そのようにしてワープロなどで文字を打ち出した原稿を作ったりする。「友人に祝電を」「ワープロで漢字」「メール」を」

◆「闘法」②は「ヲ」に(結果)をとる。⑦の「ホームラン」を打つは、打つて「ホームラン」という結果を作り出す意で、①⑦の「ボール」を打つ(「「ボール」そのものをたたく」とは区別される。

③打つような動作をして器具を操作する。特に、キーをたたいてワープロなどの器械を動かす。「暫時はもやまずに植」響(村の級治屋)「この資料は自分でワープロを」。つて作った「闘法」ヲに(道具)をとる。「ワープロ」を打つはワープロという道具を操作する意で、①⑦の「キー」を打つ(「キー」そのものをたたく)、②④の「漢字」を打つ(「キー」をたたいて、漢字や「波」を打ち出す)とは区別される。

④雨・風・波などが物に激しく当たる。「波が岸壁を」「滝水に」。たれて修行する「雷に」。たれて死ぬ「闘法」受身も多い。

⑤感動させる。また、強く刺激する。射る。「迫真の演技が観客を」「献身的な愛情に心を」たれる「臭気が鼻を」

⑥物をたたいて、ある物の中に入れる。打ち込む「柱に釘を刺す」「出る杭は」たれる「治療で針などを体に刺す。特に、注射器で薬を体内に入れる。「腕に鍼を」「右腕に点滴を」

⑦前方にはうり投げけるような動作をする。「網を」庭に水を「型枠にコンクリートを」(「流し込む」)⑧バスケットボール(サッカー)で得点するためにバスケット(ゴール)に向かってボールを投げる(ける)。「シュートを」⑨は「ヲ」に(結果)をとる。

⑩罪人などに縄をかけて動かなくする。「縄を」方策を講じる。「境内で芝居を」「逃げを」手段「打開に」手はないのか「先手を」。つて攻撃をしかける「契約成立時に手金」を」⑪「闘法」ヲに(結果)をとる。

⑫博打や、をして遊ぶ。「博打」「マーじゃん」を」⑬「闘法」ヲに(結果)をとる。

⑭囲碁で盤面に石を置く。また、将棋で相手から取り上げた駒を盤面に置く。「角の頭に金を」⑮囲碁をする。「碁を」。石を打ち下ろして戦うことからいう。「闘法」は「ヲ」に(結果)をとる。

⑯野球で、打つことによつてその役割を務める。「四番を」と同種。「闘法」ヲに(役割)をとる。「議長を務める」などを打つ。⑰⑦の「ボール」を打つ、⑱⑧の「ホームラン」を打つ、⑳の「主戦投手を打つ」など異なり、受身を作らない。

⑰野球の打撃で、その打率の成績を上げる。「三割を」⑱「闘法」ヲに(結果)をとる。

⑳みすからを前方に打ちつけるような動作をして、その動作や状態を作り出す。また、刀などを打ち鍛えて反りをたせる。「寝返り」「もんどりを」⑲「黒髪が波を」「雪崩」を」。つて攻め寄せる「刀が反りを」⑳「闘法」ヲに(結果)をとる。

①心臓が規則的な動き(「拍動」をくりかえして、脈拍を生み出す。「動悸」を)②「闘法」ヲに(結果)をとる。

③弾丸を発射して目標物に当てる。射撃する。「ピストルで標的を」④銃器を使って弾丸を発射する。発射する。「大砲を」⑤は「ヲ」に(対象)を、④は「ヲ」に(道具)をとる。

⑥敵を攻め滅ぼす。倒す。負かす。やつつける。「宿敵」「敵」「悪」を」⑦野球で、相手の投手を激しく攻める。「主戦投手を」⑧「闘法」ヲに(結果)をとる。

◆「闘法」(1)「打」は広く一般に使う。「撃」は⑩に、「討」は⑪に使う。(2)「拍手を拍つ」(「たたく」)脈を「拍つ」「搏つ」(「撲つ」)とも書くが、今は「打つ」と書く。(3)「敵国を征つ」「宿敵を伐つ」など、「征つ」「伐つ」とも書くが、今は「討つ」と書く。(4)「射つ」を「撃つ」と同じように使うこともあるが、「撃」が一般的。可能打てる「ワープロ」なら打てる。「一丸」が「一丸となる」を強めてい「全員」が「一丸となる」に当てる

らず従来の国語辞書の記述方法ではあるが、こういう動詞項目記述の枠組み自体に問題があるということになる。

自動詞、他動詞は二者択一方式でなければならない。自動詞でなければ他動詞、他動詞でなければ自動詞というように。

そもそも「自動詞・他動詞」という用語は英文法から借り入れたものである。

自動詞 = intransitive verb [略] vi, v. i. 直接目的語を要求しない。

他動詞 = transitive verb [略] vt, v. t. 直接目的語を要求する。

英語では、まず、「直接目的語を要求するかしないか」の一点で、自動詞、他動詞を区別する。また、構文的には受動文を作るものを他動詞、作らないものを自動詞とする。実に、明快である。そして、この区別は、文型を指示し、前置詞の在り方も指示する等、動詞の分類にとどまらず、英文を生成する上で有効な情報を与えるものとなっている。

日本語では、本来、目的語などの補足語はオプションな要素で必須の要素ではない。そのため「直接目的語」という基準を仮に設けたとしても、それが自明の基準とはなりえないのである。

次に、「雨に降られる」「父に死なれる」など、いわゆる自動詞による受動文、「迷惑の受け身」等の表現があり、英語の有する区別の明快性が存在しないのである。

こういうわけで、自動詞、他動詞には明快な定義が存在しないし、日本語の動詞の実態をなんら伝えるものとなっていないのであるから、学習者に無駄な努力を強いるだけの自動詞・他動詞という用語は日本語教育では使用しない方がよいのである。

### 3. 「先生、陳述ってなんですか？」—陳述単語説批判—

日本語論の講義において、文の定義に及んだ際、脚長君は講義の途中にもかかわらず、「先生、叙述・陳述の陳述ってなんですか？」と質問した。不透明な用語をそのままに、うち置いては、理解困難、一時間が無駄に成ると感じたのであろう。

以下、その日の講義の要点である。

日本語の品詞を、名詞・形容詞・動詞・副詞・接続詞・感動詞・助詞・助動

詞の8品詞とするか、この他に、代名詞・連体詞・形容動詞を認め11品詞とするか等の相違はあるものの、従来のすべての文法学説は文字化できる単語のみを文法学の対象としてきた。しかし、このような学説はもはや命運が尽きている。

従来の文法学説は符号を考察の対象としてこなかった。その結果、「文」の定義に失敗している。「文」の定義に失敗した文法学説はその成立根拠を喪失したものである。

音声言語においては、語または句の直後に置かれるイントネーションにより文は完結する。いわゆる、陳述とはこのイントネーションのことである。上昇イントネーションは疑問文であることを示し、聞き手に発話行為を促し、下降イントネーションは話し手の表現行為の一端の中止、または終止を意味する。したがって、音声言語においては、文は、分節音とイントネーションにより構成され、イントネーションにより完結すると言うことができる。

書記言語においては、文字または文字連続の直後に付される句点、疑問符、感嘆符などの符号により文は完結する。陳述とはこれらの符号のことである。疑問符は上昇イントネーションに相当し、句点は下降イントネーションに相当する。したがって、書記言語においては、文は文字と符号により構成され、符号により完結すると言うことができる。

概ね、このような解説で、<sup>あしなが</sup>脚長君は納得してくれた。彼は、さらに「これは

表7 言語表現の階層

		レベル	構成要素	表記	意味	意図
第一段階	ame	音素	音素	音素記号	不明	ナシ
第二段階	アメ	音節	音素+拍	文字(カタカナ)	不明	ナシ
	あめ	音節	音素+拍	文字(ひらがな)	不明	ナシ
第三段階	飴	語	音節+アクセント	文字(漢字)	一義	ナシ
	雨	語	音節+アクセント	文字(漢字)	一義	ナシ
第四段階	飴?	文	音節+アクセント+イントネーション	文字(漢字)+符号	一義	アリ
	雨。	文	音節+アクセント+イントネーション	文字(漢字)+符号	一義	アリ

誰の説ですか？」と追い討ちを掛けてきた。

「<sup>きん だいち はるひこ</sup>金田一春彦氏 (1913～2005) がこれに近いことをおっしゃっているのですが、文法論の中に位置付けることはしていません。また、<sup>わたなべ みゆる</sup>渡辺実氏(1926～ ) は一語文の陳述については、『無統叙陳述』という言い方をしていますが、多語文の陳述については用言等にありとしていますので、陳述単語説派です。結局、これは小池説ということになります。」

脚長君は目を丸くして聴いているだけであった。「陳述イントネーション説」はいずれ定説となるであろうが、その日が来るのはまだだいぶ先のようなのである。

#### 4. 紫式部は符号を用いたか？ —符号は原稿用を前提とした表記技術の一つ—

この日の出席カードの裏側に脚長君は次のようなつぶやきを感想として記している。

「<sup>むらさきしきぶ</sup>紫式部は源氏物語を書くのに、符号を使ったかなあ？」

これには筆者も唖ってしまった。この一言で、彼も、忘れられない留学生の一人となった。次回の講義で『源氏物語』の影印本をコピーして、符号なしの表記の在り方を提示し、以下の説明を補った。

陳述ということをも日本文法の世界に持ち込んだのは、<sup>やまだ よしお</sup>山田孝雄 (1875～1958) であった。

彼は、「犬！」「川！」という一語文を例として、これらが単語と異なり、「文」となることを指摘し、文にする為の心理作用として、統覚作用の存在を認め、これに「陳述」の術語を与えている。

陳述の発見により、<sup>おおつき ふみひこ</sup>大槻文彦 (1847～1928) の英文法そっくりの「文ハ主語ト述語トヨリ成ル」という、文の定義から解放され、「文は叙述と陳述とより成る」との定義のもとに、日本語の実態に則した真の文法の研究が始まったのである。

ただ、惜しまれることは、山田が一語文と多語文とで扱いを変えていることである。

一語文を観察する限り、文を完結させるもの、すなわち、陳述の実態がイントネーションであり、表記面では符号であることは火を見るより明らかなので

あるが、この結論を多語文に応用しなかったのである。

山田は多語文における陳述は終助詞や動詞の終止形等にあると誤認してしまっている。この誤りが後の『陳述論争』を引き起こしてしまった。

山田の誤りを、橋本進吉<sup>はしもとしんきち</sup> (1882～1945) や時枝誠記<sup>ときえだもとき</sup> (1900～1967) も踏襲し、あきれたことに、前述の渡辺実<sup>わたなべみのる</sup>や仁田義雄<sup>にったよしお</sup> (1946～) など、今日の研究者たちも引き継いでいるのである。これらの研究者たちは、陳述が単語にあると信じている。そのことは彼らの「終助詞」の扱いに端的に現れている。

たとえば、山田孝雄・橋本進吉の終助詞の定義は次のようなものである。

・山田説 上接語への接続に一定の法則があり、陳述に関係して命令、希望・感動などの意味を表しつつ文を終止させる助詞

・橋本説 言い切りの文節に付き、そこで文が終始する助詞

彼らは、一様に、「終助詞で文は終わる」と述べているのだが、実際の日本語はそうになっていない。

A ああ、わかったよ。(意味表明断定文

「十分理解したから、もうそれ以上言うな」の意。)

B ああ、わかったよ？(オーム返し型発言確認疑問文

「『ああ、わかったよ』と言っているのか？」の意。)

確かに、「よ」の後に、いかなる文節音や文字も付加することはできない。文節音や文字表記に限って言えば「よ」で終わるのである。

ただし、分節音や文字による表現は表現内容(山田の用語では「句」)に限ってのものなのである。表現内容だけでは文は完結しない。その表現内容を話し手、書き手がどのような思いで、聞き手、読み手に向かって発しているかという表現意図が明示されなければならないのである。

AとBとでは意味が異なる。したがって、終助詞「よ」で文は完結していない。句点や疑問符が付かないことには文の意味は確定しないからである。よって、陳述は音声言語ではイントネーションにより表され、書記言語では符号で表されると考えるのが正しい。

以上の説明を図式的に表すと次のようになる。



表 8

表層形態	ああ、わかったよ	+	。／？	= 文
深層表現性質	表現内容	+	表現意図	= 文
文法用語	叙述	+	陳述	= 文
音声言語	分節音	+	イントネーション	= 文
書記言語	文字	+	符号	= 文

ところで、句点、疑問符、感嘆符などの符号は明治以降、原稿用紙の普及とともに定着したもので、原稿用紙を前提としたものである。したがって、原稿用紙を使用しなかった平安時代、紫式部はこれらの符号を使用したくても使用出来なかった。影印本には句点も疑問符も存在しない。

では、文は符号で終わるといふ説は成立しないのかということそうではない。

書記言語は言語のすべてを可視的にしているわけではない。平安時代の表記では句読点のみならず、濁音や撥音、促音も表記されなかったのである。無いから無いというのは単純過ぎる議論である。紫式部は書きたくても書けなかったと考えるべきであろう。

肝心なことは、陳述は文字という分節音を可視化したものには存在しないということなのである。このことは、古典語も現代日本語と同様であったはずである。

紫式部や清少納言も「笑ふ。」と「笑ふ？」は恐らく区別していたろう。区別しなければ、日本語としてのコミュニケーションが不可能であるからだ。

なお、「終助詞で文は完結する」という説明は、現行の小・中学校の教科書でもなされている。

日本の学校では、実際の日本語とは矛盾することを平然と教えていることになる。「文法に信を置かない」児童・生徒が出てくるのも当然のことである。学校文法は、役に立たないばかりか、日本語の真実の姿を隠してしまうという害を流すことさえやっている。

## 5. 「陳述」は構文論 (syntax) の概念か、語用論 (pragmatics) の概念か？

前節までの議論で、文末のイントネーションが文の成立に関与することは確かなことであることが理解されたことと思うが、ここで、根本的な問題を論じ

て置く。

A ああ、わかったよ。

B ああ、わかったよ?

「。」「?」は表現内容を構成する個々の語には関与しないということである。文法、構文論は構成する語の配列順序に関するものであるが、イントネーションの在り方は個々の語の配列順序とは関係しないのである。とすると、イントネーション・符号は語と同列、同レベルの要素ではないということになる。

イントネーション・符号は構文論ではなく、語用論に属する概念なのである。不思議なことであるが、言語の要素を規定するには常に問題とする言語要素の一段階上のレベルの要素を持ち込まないと規定できない。

ある音声グループが音韻としてのまとまりをなすと認められるか否かは、一段階上の「語」の概念を持ち込まないと判定できない。「働き」が動詞の連用形か、名詞なのかという語としての判定は、一段階上の「文」における在り方を待たなければ決定できない。

構文論の一段階上は語用論である。イントネーション・符号は語用論のレベルの用語なのであるが、これが文の成立に関与するのはこういう言語単位の特異な在り方に起因する。

陳述は語用論の概念であるが、構文論の基本単位である「文」の成立に関与する。

## ■ 発展問題

(1) 「打つ」は一般に「他動詞」とされている。( )内の受動文の在り方を観察し、これらの「打つ」の異同について考えなさい。

- |   |                      |                                  |
|---|----------------------|----------------------------------|
| ① | バットでボールを <u>打つ</u> 。 | (ボールがバットで <u>打たれる</u> 。)         |
| ② | 柱の角で頭を <u>打つ</u> 。   | (*柱の角で頭が <u>打たれる</u> 。)          |
| ③ | 手を <u>打って</u> 喜ぶ。    | (*手が <u>打たれて</u> 、喜びが表された。)      |
| ④ | 時計が三時を <u>打った</u> 。  | (*時計により三時が <u>打たれた</u> 。)        |
| ⑤ | 波が岸壁を <u>打つ</u> 。    | (*波に岸壁が <u>打たれた</u> 。)           |
| ⑥ | 寝返りを <u>打つ</u> 。     | (頻繁に寝返りを <u>打たれる</u> と寝ていられないよ。) |

- ⑦ 動悸を打つ。 ( \*動悸が打たれる。)

\*は非文のマーク。

- (2) A ~ E 群の動詞について、①②の作業をなさい。

A 建てる・掘る

B 走る・降る

C ある・見える

D 読める・できる

E 研究する・する

① 受動文を作ることができるか？

② 作られた受動文は直接的受動文か、間接的受動文（迷惑の受け身）か？

- (3) 次の男女の会話を発音し、どのような場面での会話か説明しなさい。また、符号を使用せずに、同様の意味を表すには、表現をどのように変える必要があるか考えなさい。

女 「雨！」

男 「雨？」

女 「雨。」

男 「雨……。」

- (4) シェイクスピアの作品『マクベス』において、マクベスとマクベス夫人の間で次のような会話がなされる。

*Macb.* If we should fail?

*Lady M.* We fail. — Act I, Scene vii

この会話について、夏目漱石は次のように講義している。

名優 Mrs. Siddons といふのは殊に Lady Macbeth を扮するに妙を得た人ですが、この女が此 We fail といふ一句を三様に言分けたといふ。一つは We fail? と interrogation になるので、一つは We fail! と exclamation, もう一つは平らかに We fail. として period で終るのです。第一のはやや contempt の意がある。第二のは重々しく、第三の軽いの

は If we fail, we fail. といふ一個の諺があるのを其のまま用ゐたのであらうといふ。三つの中どれでも宜しい、気に入ったのをお採りなさい。一寸私も三様に分けて読んでお聴かせ申したいが、私なんかの読み様では何にもならない。fail するといけなから、先づ御免を蒙りませう。

We fail ?

We fail !

We fail.

三種類の読み方が可能と言うことは、英語でも「文字+符号」で文が成立するというを意味すると考えられる。「We fail ?」という表現が実際に可能なことなのかどうか確認しなさい。

## ■ 参考文献

- 1) 大久保忠利『日本文法陳述論』(明治書院, 1968)
- 2) 尾上圭介「文をどう見たか—述語論の学史的展開—」(『日本語学』15巻9号, 明治書院, 1996)
- 3) 金谷武洋『英語にも主語はなかった—日本語文法から言語千年史へ—』(講談社メチエ, 講談社, 2004)
- 4) 川島幸希『英語教師 夏目漱石』(新潮選書, 新潮社, 2000)
- 5) 金田一春彦「ことばの旋律」(『国語学』5輯, 武蔵野書院, 1950)
- 6) 小池清治『日本語はどんな言語か』(ちくま新書, 筑摩書房, 1994)
- 7) 小池清治『現代日本語文法入門』(ちくま学芸文庫, 筑摩書房, 1997)
- 8) 小池清治・赤羽根義章『文法探究法』(朝倉書店, 2002)
- 9) 国立国語研究所編『動詞・形容詞問題語用例集』(秀英出版, 1971)
- 10) 国立国語研究所編『動詞の意味・用法の記述的研究』(秀英出版, 1972)
- 11) 島田昌彦『国語における自動詞と他動詞』(明治書院, 1979)
- 12) 須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』(ひつじ書房, 1995)
- 13) 田中章夫「終助詞と間投助詞」(『品詞別日本文法講座 助詞』明治書院, 1973)
- 14) 時枝誠記『日本文法口語篇』(岩波書店, 1950)
- 15) 西尾寅弥『現代語彙の研究』(明治書院, 1988)
- 16) 仁田義雄『日本語のモダリティと人称』(ひつじ書房, 1991)
- 17) 仁田義雄『ある近代日本文法研究史』(和泉書院, 2005)
- 18) 橋本進吉『改制新文典別記』(富山房, 1938)
- 19) 宮島達夫「くことばの相談室 自動詞と他動詞」(『言語生活』290号, 筑摩書房, 1975)
- 20) 山田孝雄『日本文法論』(宝文館出版, 1908)
- 21) 渡辺 実『国語構文論』(塙書房, 1971)

## 著者略歴

こ いけ せい じ  
小池清治

- 1971年 東京教育大学大学院  
博士課程単位取得  
1971年 フェリス女学院大学  
専任講師  
1976年 宇都宮大学教育学部助教授  
現在 宇都宮大学国際学部教授

あ き も と み はる  
秋元美晴

- 1986年 青山学院大学大学院  
博士課程単位取得  
1989年 恵泉女学園大学専任講師  
現在 恵泉女学園大学教授

う し い え び こ  
氏家洋子

- 1971年 早稲田大学大学院  
博士課程単位取得  
1972年 早稲田大学専任講師  
1974年 英国シェフィールド大学  
研究員  
1985年 山形大学助教授  
1992年 明星大学教授  
1997年 山口大学教授  
現在 ノートルダム清心女子大学  
教授

シリーズ〈日本語探究法〉10

### 日本語教育探究法

定価はカバーに表示

2007年3月25日 初版第1刷

著者 小池清治  
氏家洋子  
秋元美晴  
発行者 朝倉邦造  
発行所 株式会社 朝倉書店  
東京都新宿区新小川町6-29  
郵便番号 162-8707  
電話 03(3260)0141  
FAX 03(3260)0180  
<http://www.asakura.co.jp>

〈検印省略〉

©2007 〈無断複写・転載を禁ず〉

教文堂・渡辺製本

ISBN 978-4-254-51510-7 C 3381

Printed in Japan